



環境倫理と技術開発

名城大学 理工学部長 岩垣雄一

最近、環境問題の中でも、「地球環境」という言葉がしばしば新聞やテレビに現われるようになってきました。これは、われわれが二酸化炭素やフロンガス等を放出することによって、地球の平均気温が上昇したり、紫外線の防護壁となるオゾン層が破壊されるなど、人間にとって好ましくない地球規模の環境変化が起こり、社会的な問題になったためです。このように地球環境がやかましくなったのは、ここ数年の間ですが、その発端は1980年代に入って、米国政府が「紀元2000年の地球」という報告書を発表したからです。さらに遡れば、1972年にローマクラブが研究をMITに依頼して作成した「成長の限界」という報告書の中で、急速な経済成長や人口増加などによって、環境破壊や食糧不足がおこると同時に、人間活動の基盤であるエネルギーや鉱物資源が有限であることを警告したことによるものであります。

人類が四足歩行から直立二足歩行に移ったのが500万年～600万年前といわれていますが、その後原人から現代人と進化し、さらにチグリス・ユーフラテス川のほとりで農耕を始めるにいたったといわれるのが約1万年前です。また現代産業の先駆といわれる産業革命が始まってから、まだ200年余りしかたっていないのです。そして原子力や電子計算機、ロボット技術などのすばらしい近代技術がこの世に出現したのは、第二次世界大戦後の数10年の間に過ぎないのです。南極の氷床コアの分析から、空気中の二酸化炭素の濃度が産業革命以後に急速に増大したことが見つかっています。この100年間に、世界人口は3倍以上増えたのに対して、世界の総生産は22倍になり、化石燃料は12倍も消費していることがわかっています。

こうした事実から、人間が人間のために進めてきた「開発」という行為が、大気、水、土壌、森林、河川、海洋、生物といった自然環境を大きく変えてきたことは、誰も否定するわけにはいきません。しかし、これまでの開発に伴う自然環境の変革が何故いけないのかと、その理由を質ねられても、すぐには返答できません。われわれの身に直接その影響がせまっているという意識がないからです。環境問題を考えるのには、その基礎となる考え方、すなわち環境哲学が存在するはずで、そして環境哲学に相当するものが、環境倫理学なのです。

環境倫理学には三つの主張があります。その第1は、自然の生存権で、人間のみでなく、生物の種、生態系、景観などにも生存権があるとするもの、第2は、世代間倫理で、現世代の人間は未来世代の人間の生存可能性に対しても責任があるとするもの、第3は、地球全体主義で、地球は無限ではなくて生態系にとって閉じた世界であるとするものです。最近の環境行政はこのような考え方が基礎となっているのです。「地球環境」とか「宇宙船地球号」という表現は、第3の概念からきており、「持続可能な開発」という言葉は、第2の考え方にもとづいています。ただものを言わない生物や自然物にも生存権があるとする第1の考え方には、理解するのに抵抗を感じるでしょう。しかし、最近では「共生」という表現をよく使いますが、それがその考え方なのです。「人間中心主義」をいましめる思想ですが、「自然と人間」との関係を考える古くて新しい考え方です。

「成長の限界」が世に出てから20年経過した1992年に、同じ著者達によって「限界を超えて」が出版されました。20年間の資料を取り入れて予測のやり直しをしたものですが、この表題の意味を、監訳者の茅陽一東大教授は、「もはや限界を超えてしまった」という意味と同時に、人類社会は「限界を乗り越えることができる」という意味にとるべきであろうと解説しています。限界を超えてしまったということは、今のままでは人類社会は破滅に向って進んでいるということです。では乗り越えるにはどうすればよいのでしょうか。それには、再生可能な資源の消費ペース、再生不可能な資源の消費ペース、汚染の排出量の三つをうまくコントロールしなければなりません。これが可能かどうか、人類の将来を決める鍵なのです。そのためには、われわれの価値判断の基準を改めなければなりません。ある人は経済的価値の他に、生態環境価値、社会的・文化的価値の三つの総合的価値の調和を主張していますが、今やGNPのみで価値判断するのではなく、どうして汚染排出量を減少させるか、いかに再生不可能な資源の代替技術を早く確立するか、にかかっているのです。愛知電機株式会社の技術開発力に大いに期待するところです。